



外国人とともに生きる大田・市民ネットワーク 会報

つうしん  
通信

No.123  
2021-7.1

NEWSLETTER

## 第13回一般社団法人OCNet社員総会報告

政府より新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた3回目の緊急事態宣言が4月25日に発出されたが、変異ウィルスの感染も広がり感染者数は全国的に増加する一方で、収束の兆しは一向に見られず不安な状況が続いている。

隔月で行われていた理事会も開催できない状況が続いたが、9月よりオンライン（zoom）で行なうこととし、各部門でのコロナ禍での活動状況や今後の取り組み、また運営についてなど話し合った。各部門でも新型コロナウイルスの対応策に思案を巡らせ、中止せざるを得ないことも多かったが、慣れないオンラインなどを取り入れ、できることから工夫してそれぞれの活動に取り組んだ。

誰もが予想だにしなかったコロナウィルスとの闘い、今まで当たり前だと思って過ごしていたことが当たり前ではないとつくづく考えさせられる1年だった。収束に至るまでにはまだまだ時間がかかると思われるが、皆で協力し乗り越えていきたい。

相談は毎週土曜日の事務所での活動は中止とした。また、多言語相談会、高校進学ガイダンス、通訳派遣などは昨年度同様、いろいろな人や他機関などと連携を取り、協力し合いながら、地域に居住する外国人のさまざまな相談に応じたり、子ども達の進学のサポートを行ったりした。また、高校支援プロジェクトとして、高

OCNet代表理事 天明 尚子  
校生の授業におけるの日本語支援や、高校入学時に必要な書類の記入のサポートなども行なった。

にほんごのひろばにおける日本語学習支援は、昨年2月末より対面での授業は休止が続き、新規学習者の受け入れも中止している。また、コロナの影響で退会したスタッフや、コロナが収束するまで活動を休止しているスタッフが多い。9月よりリモートでの授業が可能な学習者とスタッフでオンライン授業を開始した。子ども教室では5月よりオンライン授業に対応しており、新規学習者の受け入れも9月から開始した。恒例としていた忘年会やお花見、子ども教室の遠足、クリスマス会は中止とした。対面授業の開始時期が予測できないため、ふれあいはすぬまの教室予約は10月以降しないこととした。

中国帰国者センターの事業では、コロナ禍での帰国者の医療や健康に関する生活相談や通訳派遣を行った。年間行事としていた一泊旅行は中止したが、センターの集いはアプリコ小ホールで飲食を伴う交流はせず、DVD視聴、中国残留孤児の証言を企画し行なった。交流サロンではマスク、グローブ、お雛様などのキッドや教材を送付し手芸作りをしてもらうなど、高齢で外出できない帰国者の人達が自宅で楽しい時間を過ごせるよう考えながら行なった。また、

医療相談、歯科講習会では zoom でも対応できるようにした。事務局は、ホームページの更新を行い、事務所の予約スケジュール管理をオンライン化した。

OCNet 通信の発行はできず、事務局会議も行えなかった。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い緊急事態宣言が発出されるたび、商業施設や飲食店は時

短営業や休業を要請され、経済はひっ迫し、多くの人が職や住居さえ失い生活に困窮し不安を抱えている。その中で、日本語もままならず弱い立場の外国人労働者にとってはより厳しく不安な状況にある。こんな時だからこそ再度私達の立ち位置を考え、「外国人に寄り添いともに生きる」ことを再確認しながら皆で新たな取り組みを模索していきたい。

## にほんごのひろばスタッフより ～2020年度を振り返って～

### ◆にほんごのひろば 水曜日教室

水曜スタッフ 会沢美枝

2020年、OC ネットだけではなく、世界中の人々が苦しい生活を強いられました。そしてそれは1年以上たった今も続いています。今現在、OC ネット大人クラスでは、水曜、金曜スタッフがリモート授業という形で、学習者に日本語を教えています。私が所属している水曜クラスのことを中心に書きたいと思います。

世の中での価値観がすっかり変わった一年でした。水曜日の夜に、当たり前のように授業をし、最後にお茶を飲んで談笑していた景色が当たり前ではなくなりました。去年のスケジュール帳を引っ張り出して、読んでみました。水曜クラスでの最後の授業は3/11。そして約4か月後の7/1に1度授業をし、その後また休みとなり、8月末にスタッフでZOOMの使い方の練習をし、9月からリモート授業をスタートしたのでした。

私のスケジュール帳には、マスク、トイレットペーパーの買い占めや、パンや米がスーパーの棚から消える異常事態（まるで3.11の再来のよう）が書かれていました。中には「3/2から全国の小、中、高校一斉休校で、娘がニコニコして帰宅。」なんてのもありましたが。(笑)

学習者との連絡はショートメールで行いました。クラスがお休みになる事、元気であるかの確認も行いました。書くことには慣れていないだろう学習者が一生懸命返信をしてくれているのが、書面で伝わりました。対面での授業がな

くなり、リモート授業に変わるまで約半年。リモートを受けたいと言っていた学習者が、スマホしかないからと断ってきたり、小学生のお子さんがいる方との連絡が疎遠になってしまったり。コロナ禍で日本人でも職を失ったり、健康を害したりする中、日本で暮らす外国人はもっと辛い思いをしているに違いないと思いつつ、何の手助けも出来なかったことが悔やまれます。普段は日本語を話す機会がなく、OCの教室でのみ日本語を使うという学習者もいる中、このブランクは相当なものになると思います。

何とか手探り状態で始まったリモート授業。初めはもどかしくも感じましたが、マスクを付けなくて良い分、口の動きや表情もわかるのでやりやすかったり、「ふれあいはずぬま」へ行かなくても良いので、雨の日や寒い日などは「リモートで良かったかも。」と思ったり、....。

私は同時に二人の学習者と授業をしているのですが、学習者同士が画面を通して会話し、仲良くなっていくのを見るのも微笑ましかったです。スタッフとの現状報告も、月に一回ZOOMで行い意思疎通は来ています。

リモート授業を始めて9か月が経ちますが、今の現状に落ち着くのではなく、「ふれあいはずぬま」でのあの活気のある空間をまた、取り戻すべく、水曜、金曜スタッフ一同、力を合わせて進んでまいりたいと思っています！

2020年3月から始まった一斉休校により、卒業式も入学式もままならず、学校再開後も分散登校などが実施される中、子どもたちは進級・進学しました。日本語教室は2月下旬から休止し、再開の目処は全く立たない状況が続いていました。学ぶ時間や場所は大幅に減少し、これまで積み重ねてきた日本語を忘れてしまうのではないかと心配する日々。保護者からは、オンライン授業を希望する声がいくつか寄せられていました。

そこで5月から、対応できるスタッフと希望する学習者に絞ってオンライン授業を開始しました。でも、スタッフにオンライン授業の経験があったわけではありません。きっと何とかなるさと、少々楽観的な心構えでスタートしたというのが正直なところです。つまり見切り発車だったわけですが、四苦八苦しつつもどうにかなることを実感。その後は、どうにかあったのをいいことに、広くスタッフに呼びかけて対応できる人数を増やし、同時に学習者にもオンライン授業への移行をお願いしました。

コロナ禍で顕在化したことの一つに、子どもたちのデジタル格差があります。そんな中、大田区内の国際交流団体「地球対話ラボ」から、ノートパソコンとWi-Fi機器を無償貸与していただけるとの話がありました。大変ありがたく、現在も継続して希望者へ貸し出し、活用しています。

そんなこともあり、もちろんスタッフ一人一人の努力もあり、夏頃にはほとんどの学習者がリモートで授業を再開することができました。スタッフはそれぞれ迷ったり悩んだり、まさに手探りで授業を進めてきました。実際の授業の様子については後半でご紹介しますので、ぜひ

最後までお読みください。

新規学習者の受け入れは対面授業をやめてからストップしていましたが、その間にも数件の問い合わせがあり、9月から再開しました。原則オンライン授業としていましたが、ゼロから日本語を学び始める子どもにリモートで教えることは容易ではありません。そのため、ゼロベースの新規学習者には、例外としてOCNet事務所での対面授業も行っています。また、相談部門の高校支援プロジェクトで支援している高校生から、春休み限定で日本語を集中的に学びたいという希望があり、これも例外として対面授業で実施しました。

年が明けると、毎年受験シーズンが本格化します。コロナに追われていてもそれは変わりません。2020年度は1名が高校入試に臨み、見事、希望していた全日制高校に合格。こんなご時世ですが、高校生活を満喫してほしいと思います。

現在、学習者の人数はコロナ前よりも増えており、一人のスタッフが複数人を担当しても追いつかず、大人教室のスタッフにも手伝っていただきながらの教室運営です。オンライン授業はどうか軌道に乗りましたが、一方で課題も残っています。残念ながら、学習者全員がオンライン授業に移行できたわけではありません。スタッフも同様です。全面的な対面授業再開の目処が立たない中、繋がりをどのように持ち続けるか。また、スタッフ間の情報交換・情報共有はどうすべきか。少しずつでも、取り組んでいきたいと思っています。

最後に、スタッフから寄せられた授業の様子などご紹介します。リモートならではのエピソードもたくさん集まりました！

## ～こども教室のスタッフから寄せられたエピソード～

- ・カメラの扱いが上手で、自分が書いた文字はもちろん、読んでもらいたい箇所、見せたいタブレットの画面、運動会でやるダンス、自分の口の中までを、こちらがちゃんと見えるように映してくれます。カメラを持って家中を案内してくれたこともありました。すぐそこにいるような感じでした。
- ・“～て、～て”の構文学習中、「頭が痛いんです。どうしますか？」と問いかけると、学習者の窓から「ピーポー、ピーポー。」救急車のサイレンが……そのタイミングに二人で笑ってしまいました。リモート学習、生活音も時には学習推進に力を貸してくれています。
- ・現在日曜日の午前、午後にLINEを使ったリモート授業に汗をかいています。  
中一生では国語の練習問題のとき、学習者が解答を正しく書いたかどうかの確認がリモートではやっかいです。筆順は？、促音の「っ」、濁音を理解しているか？対面授業では目で見て確認できるのですが。小二の入門者の場合では、つまる音を出してもらうのが一苦勞です。ナ行とラ行の区別を理解してもらうのも簡単ではありません。  
コロナが終息して対面授業が再開出来るまで試行錯誤が続きます。
- ・初期指導として対面授業で頑張っています。とてもまじめで、休むことなく一生懸命。カードを使って楽しく進められています。
- ・リモートですが、小学校3年生とは思えず、パソコンをこなしていて、チャット機能まで使って会話をしてくれます。授業前は、自らピアノ演奏をして、わたしを呼び出します。びっくりします。リモートならではのレッスンです。  
中学生は、学校のテストを意識し、ポイントを教えてほしいと真剣に取り組み、着実に成績向上を子供なりに考えているようです。
- ・突然舞い込んできたオンライン授業のお話ですが、これを機にデジタルに強くなりたい！という強い願いでトライ。対面以外は経験がなく戸惑う事も多かったですが、そこは若者スタッフに助けをもらい、なんとか一ヶ月位で子供1名を大人2名で担当する授業が軌道に乗りました。大人は前日までに教材や分担を話し合っておき（世間話も）、1人が説明したらもう1人はホワイトボード等を使って大切なポイントを押さえる、こんな工夫が少し理解を進められたように思えました。  
今回、図らずもデジタルをツールにしての授業で1年生のお子さんでも1人でIDとパスワードを入力してオンラインに参加出来るようになった事はすごいと思います。大人はオンラインのホストを勤める所までデジタルに慣れた事が大きな成果と、自画自賛（笑）してまーす！
- ・3度目の緊急事態宣言で、楽しみにしていた遠足が中止になったそうです。授業の最初に、学校のトピックスをあれこれ、話してくれますが、コロナのせいで、学校でもあんまり話ができない

のかなあとと思います。Zoomの画面越しだと、マスクなしで、気兼ねなくしゃべれます。最近、学校からパソコンが1台貸与され、リモート学習ができるようになってきているようです。画面越しに、学校のパソコンで、どんな勉強をしているのか、見せてくれたりします。パソコンが得意な子なので、合ってるかなあとと思いますが、でも、カタカナも覚えてほしいなあ。

- ・本当はZoomでやりたいのですが、相手の希望で、LINEでやっています。相手に書いてもらったものを見るのがおもしろい。「カメラに向けて見せてー」と言うと、「これで見えるー？」とカメラの真ん前に紙を持って来る。読めない。「近すぎる。もっと離してー！」と言うと、2mも離す。これも読めない。書いたものを見せてもらうのは、あきらめました。
- ・リモートで問題集に取り組んでいる時のこと。「答えは見ないで書いてね」と言ったけれど、どうもあやしい。たまたま側に来た弟くんにお兄ちゃん、答え見てる？と聞くと、「うん！」と即答。その後、兄弟喧嘩が始まりました。
- ・お家で昆虫や爬虫類を飼っていて、カメラ越しに紹介してくれます。でも名前が難しい。文型練習にもよく登場しますが、「ナイルモニターが欲しいです」とか、「クレストッドゲッコーにココロギをあげます」なんて言われてもさっぱり分からない。「それは何ですか？」と質問すると、待ってましたとばかりに図鑑を開いたり本物を連れてきたり……。その手には乗らない！と思いつつ、話が脱線してしまうこともしばしばです。

## ◆高校支援プロジェクトについて

OCNet 理事 相談担当 西尾加朋

OCNetは、学習や教育の支援において、成人向け日本語支援と、主に義務教育期間の子どもの日本語支援と高校進学支援（多言語高校進学ガイダンス含む）を行ってきました。しかし、その中間に位置する、中学を卒業してから成年になるまでの青少年期の人々を対象とした支援はありませんでした。そのため、義務教育を終えた学習者のその後や、同年代の外国ルーツの人たちの日本語習得状況、学校や日常生活や社会参加の状況や、その過程で生じうる問題を可視化することが難しい状態でした。

10年程前、都立大森高校校定時制課程との協働で「大森高校プロジェクト」を実施していましたが、終了後は、高校に在学している外国ルーツの生徒たちとのかかわりも途絶えていました。

ところが数年前から、「多文化共生推進センター多言語相談窓口（当時）」に、付近の都立高校の関係者側と、外国ルーツの生徒や保護者側の双方から、学校生活についての様々な相談が寄せられるようになってきました。外国ルーツの生徒が多くいる高校の現場で種々の問題が生じていることを確信し、子ども若者支援は一定年齢の到達を機に中断してはならず、継続して行わなければならないことを痛感しました。

以上のことから、外国ルーツの高校生を支援するプロジェクトを立ち上げることを検討し、2018年2月に、第一回目のミーティングを開催しました。レガートおおたとの共同の形で「高校支援プロジェクト」を立ち上げることになり、高校での日本語支援、通訳、相談の3つが中心とすべき支援であることが確認されました。

2018年4月から、都立蒲田高校で放課後日本語支援（日本語指導外部人材活用制度）を開始し、OCNetとレガートおおたの混合チームで支援員が参加しました。以降、これまでの実績校は4校、今年度の支援校は3校で（各都立蒲田高校、大森高校、大田桜台高校）、現在支援生徒数は11名にものぼり、OCNetの4名のスタッフが支援にあたっています。2018年に初めて支援した当時1年生だった蒲田高校の生徒は、今年3月に高校を卒業し、それぞれ大学に進学しました。

現在は、日本語支援が中心ですが、活動内容は多岐に渡り、2018年には外部講師を招き、支援員の研修会を2回開催しました。2019年4月と2021年4月には「高校入学ガイダンス」を開催し、高校に入学したばかりの新入生を対象に高校のシステムや在留資格や入学後申

請できる支援金についての説明や、個別相談を行いました。さらに今年3月には、「高校入学書類の記入サポート」も実施しました。

当初は有志の方が参加していた、品川区のIWC国際市民の会は昨年から正式に加わり、他にも都立高校の教員の方々、大学教員の方などにも有志で参加し、多様な知見が得られるプロジェクトになっています。また、各活動準備に当たって、ミーティングを定期的に行っています。

現在、全国の日本語支援が必要な高校生の中退率は約10パーセントで、高校生全体の中退率の7倍とも言われています（文部科学省令和2年1月）。本プロジェクトでは、外国ルーツの生徒の中退を防ぎ、将来の進路を確保することをコンセプトに、今後も地域の外国ルーツの高校生の支援活動に当たっていきたいと思います。

## ◆高校での日本語支援

OCNet 理事 こども教室水曜日担当 琴崎 馨  
こども教室水曜日担当 望月智子

### A. 全体概要

ニーズの発生は：

東京都では、2018年度からの「私立高校への授業料無償化」により、都立高校に定員割れが発生。そのために、学校にとっては、予期せぬ「日本語能力に一定の限度がある生徒」を迎え、その対応にせまられる、という背景。

高校（全日制）放課後の日本語支援（補講）「日本語指導外部人材活用事業講師」として始まる。

2020年度は、

対象生徒数 6人@3高校 支援者 2人で実施

生徒一人に週1回、1~2時間。

支援者はOCNet日本語教室スタッフから琴崎と望月の二人

最終目標：

中退を防ごう！！ そのためには：生徒に希望を持たせよう。 生徒に寄り添おう。

何をやるか？ 生徒の望むことをやる。

生徒それぞれに、望むことは違う。多様である。

- 科目の支援。授業で配布される課題プリントを一緒に解く。
- 日本語の基礎力の強化。

例えば、JLTPT日本語能力試験の受験対策。

例えば、漢検の教材を元に、漢字力の強化。

- 学校からの通知文書を理解したい。
- 大学、専門学校の受験の準備。

## B. 個別概要：2019年・2020年度の各生徒の主要な個別支援状況

### 1. 都立 A 高校の A 君

フィリピンつながりの生徒

中学生年齢で来日し、夜間中学に通う。都立 A 高校に入学し、琴崎が在学中の3年間に支援  
都内某大学の英語コミュニケーション学科の入試を受け、合格。2021年3月に高校卒業した。

#### ●支援内容

- 1) 教科の支援：特に国語（現代文）の課題プリントを一緒に解く
- 2) 学校からの通知文書があれば、その説明
- 3) 指定校推薦を使った大学受験：希望の大学の資料を集め、一緒にそれを読み解いた。自己PR文なども一緒に書いた。

### 2. 都立 A 高校の B さん

中国つながりの生徒 2021年3月に卒業

高校在学中3年間、OCNetのスタッフである望月ともう1名が支援

本人の希望により、JLPT 日本語能力試験の受験対策に特化して支援を実施。N2を受験して合格  
美術部に属し、東京都の美術コンテストでもいくつかの賞を獲得

自分の描いた作品に込める気持ちを日本語で表現する力に本人が不足を感じ、日本語強化を希望  
これが大学受験の面接でも生かされ、美術大学への進学を果たした。

### 3. 都立 A 高校の C さん

高校3年生の後期に、本人の希望で、専門学校進学目的に特化して支援を実施  
琴崎が担当

希望する進路は、パティシエになるための専門学校

一緒に、専門学校の資料を収集し、比較表をつくった。

面接の問答想定を一緒に考え、練習した。

### 4. 都立 B 高校の D さん

ネパールつながりの高校1年生

中学に入れる年齢を過ぎて来日し、日本の中学に入ることなく、高校に入学

琴崎が担当

学科の名称、1年間の年間予定から説明した。

国語とは、日本語のことであること/1年間に3学期あること

高校の中では、全日制と定時制はまったく別のものであり、組織からして別モノであること  
などなど

#### ●支援内容

- 1) 本人は、漢字語彙に弱かった。学校の英語副教材である「フレーズで英単語 3000」にある日本語に振り仮名を支援者が記入した。

- 2) 生物、物理、世界地理などは、すでに母国ネパールで履修済みであった。日英の単語表をつくって、当人に渡した。
- 3) 学校での国語総合の副教材「常用漢字1・2トライ」については、小テストに合わせて、漢字語彙の意味を英語で書き込んだ。
- 4) 当人は、JLPT 日本語能力試験にも強い関心を示している。同対策には、2021 年度から、望月が対応。

## 5. 都立 B 高校の E さん

中国ルーツの高校 1 年生

望月が担当

日本の中学を経て、高校に入学している。中国ルーツゆえに、漢字の意味は理解するが、日本語としての漢字の読み方ができていない。そのため、本人の希望により、特に日本語の語彙に焦点をあてて、日本語を指導。漢字の成り立ち、部首の構造など基礎から教える。

## 6. 都立 C 高校の F さん

フィリピンつながりの高校 2 年生

琴崎が担当

口語はなめらかで、学校での友達関係も良好。 学業成績も悪くない。  
ただし、漢字語彙に弱い。 語彙はわりと豊富だが、同音異義語に弱い。  
そのため、古文の現代語訳を読んでも、内容が十分に理解できない。

### ●支援内容

国語（現代文）および国語（古文）の現代語訳について、ストーリーを日本語でかみくだいて説明。

## C. まとめ

強調したいのは、個々の生徒で、希望する支援が違うということ。 多様性がある。  
とにかく、生徒の希望に応じた支援をすることが重要と考える。  
それによって、学校の授業・指導に対する補完の役目が果たせると考えている。

この支援により生徒は「チンプンカンプン」から「分かり始める」に移行するので、あとは生徒のやる気に期待。

日本語支援は通訳ではないことに留意。

琴崎は、日本語の単語を英語に置き換えることはあるが、英語で生徒に話しかけることはない。

望月は、生徒の母語に頼ることなしに、「やさしい日本語」で支援を展開。

みんなが共通する漢字の読み書きを自分が楽しみ、生徒が漢字を学ぶことは、楽しいと思えるような教え方を生徒と共に模索中。

生徒を、「チンプンカンプン」から脱出させたい。 これが原点。

生徒の「あ、わかった」とにっこりする笑顔で、達成感が生まれる。



## おもな活動報告

### ■多言語無料相談会

9月12日（土）スカイプによるオンライン相談

東京都リレー専門家相談会として開催

相談件数 9件（6人 複数相談あり）

相談内容内訳（件数が多い順）：在留資格（3件）、労働（2件）、結婚・離婚（1件）  
薬物（1件）、子ども・教育（1件）、借金（1件）

国籍：中国、フィリピン、ネパール、タイ、フランス、エジプト 各1人

### ■東京南部多言語高校進学ガイダンス

（主催：OCNet、レガートおおた、IWC国際市民の会、多文化共生教育研究会）

8月2日（日）品川会場（品川区中小企業センター）

来場者：17家族41名（子ども16名、保護者等23名、見学者2名）

家族数内訳：中国12、フィリピン2、ネパール1、インド1、ギニアビサウ1

10月18日（日）大田会場（都立六郷工科高等学校）

来場者：17家族 34名（子ども14名、保護者等20名）

家族数内訳：中国9、台湾1、フィリピン3、ネパール3、ベトナム1

### ■高校入学書類記入サポート活動

3月2日から3月31日までの平日および土曜日。

場所：mics おおた 相談・交流室・OCNet/レガートおおた共同事務所

担当：琴崎、望月、西尾 合計7名支援

予約制でのサポートであったが、予約をしないで来る方が多く、mics内の「国際都市おおた協会多言語相談窓口」のスタッフ（レガートおおた所属）に対応してもらった方もいた。3月3週目からは、担当者が順番にOCNet事務所に待機して、予約なしでmicsにきた相談者に対応するようにした。

### ■高校入学ガイダンス

2021年4月18日（日）13:30~16:10

場所：大田区立消費者生活センター大集会室にて開催。

※都立高校の成績評価、試験、進級と留年、卒業後の進路、奨学金などの説明や個別相談。

## 入管法改悪法案は廃案となった。が・・・

### ◆長期収容問題を解消するための救済措置の検討が、一転して悪法の提出へ

在留資格が最初からなかったわけではない。さまざまな事情で在留資格を失い、なお、出身国に戻ると身の危険がある、日本に家族がいるなど帰れない事情のある人がいる。そのような人を、長期に収容し、また劣悪な処遇を行ない、収容所内で死亡事件が多発する中で、救済措置が検討された。が、一転して、救済ではなく「迅速な排除」の法案が提出された。行政、政治家、メディアに充満している「不法滞在者」への偏見をてこに、恣意的な排除権限の強化で問題を解決する、とすり替わった形さ。

### ◆法案の問題点

【「送還忌避者」を「迅速に帰国させる。」】繰り返すが、出身国に戻ると身の危険がある、日本に家族がいるなど帰れない事情のある人を無理やり「押し返す」。この「押し返す」ことをプルーフマンという。国際的には禁止されている。これを、ノン・プルーフマン原則という。

【監理措置。】「在留できるかわからないまま監視の下におかれる生活では、安心を得られず、将来の設計もできないという意味で、人生の可能性が奪われた状況が続くことになります。くわえて収容、仮放免、監理措置のいずれもが、入管の独断によって決定されることになっており、入管の恣意的な、あるいは誤った対応を防ぐ術はほとんど規定されていません。国連の人権機関等から繰り返し勧告されているように、無期限の収容を認めている現在の収容制度そのものを国際水準に改善することこそが必要です。」

【難民申請者に対する送還停止効の例外規定。】「複数回の難民申請を「制度の濫用」とする認識にもとづいていますが、すでによく知られているように、問題の根底には、日本では難民認定制度が整備されていないために、結果として認定率が非常に低いという事実があります。こうした状況のなか出身国での迫害等から逃れてきた人々が何度も難民申請を繰り返すのは当然です。にもかかわらず、難民申請中であっても送還できるようにする今回の法案は、難民条約違反ですし、何よりも難民申請者の生死にかかわる問題を引き起こしかねません。」

【日本政府こそが、】「そして何よりも、今回の法案は、在留資格がない状態は、「ルールに違反」をした外国人本人の責任であることを前提としています。しかし、在留資格の有無は本人の責にのみ帰せられるものではありません。適切な移民政策が確立されないなか、外国人を多くの場合、安価な労働力として利用してきたのは日本社会です。またこれまで、難民認定は適切に行われず、在留特別許可も入管の恣意的な判断によって決められてきました。日本政府こそが、家族の結合権の無視をはじめ国際条約という「ルールに違反」をしてきたのです。」

（「」内は移住連・「入管法改悪に対する抗議声明」より）

### ◆廃案にした移住連と全国ネットワークの力

この法案に注目を集め、反対の世論を結集したのは移住連（移住者と連帯する全国ネットワーク）であると言ってよい。

移住連は1990年代の、移住外国人の支援団体の全国ネットワークから発足し、東京の事務局が主に政策提言を担当し、毎年の省庁交渉を主

催し、隔年の全国フォーラムと全国ワークショップを組織継続してきた。

10年ほど前からNPO法人化し、事務局には複数名の専従職員を擁して、彼らが日常的な口ビ活動や全国への情報発信等を毎日精力的に行ってきた。また、全国ネットワークには、各地で移住者の支援に携わる支援団体が参加している。

移住者を研究する大学教員や研究者、自治体職員、弁護士も各プロジェクトに所属し活動している。大学生や大学院生も、インターンやプロジェクトの実行委員会への参加などで関わりを持っている。

こうした日常的な活動の力が、今回の入管法改悪反対への早期からの取り組みに結びついている。改悪案を早期に把握し、入管法改悪キャンペーン（[openthegateforall.org](http://openthegateforall.org)）を結成し、全国署名を展開し、審議開始時には国会前の連日のシットイン（座り込み）を組織した。報道するメディアや審議に関係する国会議員とも連携を取ることができた。

今回特に焦点化されたウィシュマさんの死亡事件においても、支援団体が彼女と伴走的な支援をしてきたからこそ、入管が隠蔽しようとしてきた事実を次々と暴露し、彼女の尊厳を守りつつ、偏見を打ち返す具体的な情報発信が可能だったと考える。

筆者は1993年にOCNet（外国人とともに生きる大田市民ネットワーク）の結成に参加し、いまだほそぼそと会員として在籍している。

OCNetは、移住連の結成にも主導的に関わり、初代事務局長はOCNetの故・鈴木昭彦さんであった。その後もOCNetは移住連事務局に参加しているが、10年ほど前から、筆者が移住連事務局の担当を引き継いだ。とは言うものの、最近は、なかなか事務局会議への出席も滞りがちになり、1年近く参加ができていなかったが、この入管法改悪反対を契機に活動に復帰した。特に署名集約の人手不足、ということで3日間ほど事務所に詰めたのが契機で、国会前シットインの朝の設営補助や、昼の集会のSNS発信などを担当した。恒常的に活動を担えているとは到底言い難いが、多少なりともこの期間の戦力には加わったかな、というところだ。

### ◆残っている、重く厳しい課題

ただし、今回は改悪案の今国会上程を断念させただけで、現状を変えたわけではないことを決して忘れてはならないだろう。入管の長期収容、非人道的処遇、難民認定率の著しい低さ、等々の酷い現状はそのままであって、移民を移民として認め、人権を尊重する社会政策への転換が、あくまで目標であることが忘れ去られてはならない。

そして、この間同じ国会の中で、改悪少年法、また、重要土地調査規制法案が、反対運動の功を奏することもなく可決されたことを、厳しく総括検証しながら、次の取り組みを構想していかなければならない。とりわけ、重要土地調査規制法案可決の問題は、重く厳しい。



## 今後の活動予定

### ■多言語無料相談会

8月28日(土) 会場:mics おおた教室  
東京都リレー専門家相談会として開催  
オンラインと対面の両方の形式で相談可能

### ■東京南部多言語高校進学ガイダンス

主催:OCNet、レガートおおた、IWC 国際市民の会、多文化共生教育研究会  
8月1日(日) 品川:品川区立中小企業センター 13:00~16:30  
10月10日(日) 大田:都立六郷工科高等学校 13:00~16:30

## 事務局からのお知らせ

2020年度は年度初めから新型コロナウイルスの影響で活動の制限を余儀なくされ、OCNet通信を発行する機会がありませんでした。

今回は、2020年度の経験を今後に生かすための記録として、2020年度増刊号を発行する運びとなりました。

日々の活動の中で感じたことなど、皆様からの投稿も募集しています。

次回の通信の発行は秋ごろの予定です。

OCNetの公式HPが新しくなりました。

にほんごのひろばの対面授業再開はHPでお知らせいたします。

スマートフォン対応で閲覧しやすい表示になりました。

通信やHPの感想・ご意見などお待ちしております。

発行/一般社団法人OCNet

URL: <http://www.ocnet.jp>

住所: 〒144-0051 東京都大田区西蒲田 6-36-14 TKK マンション 1F

Address: 1F, 6-36-14 Nishikamata, Ota-ku, Tokyo, 144-0051

TEL&FAX: 03-3730-0556 E-mail: [jimukyoku@ocnet.jp](mailto:jimukyoku@ocnet.jp)